News Letter 第 59 号
鹿児島国際大学附置地域総合研究所
2025年1月発行

■ 目　次

地域総合研究所長あいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
共同研究プロジェクト・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
清水基金プロジェクト研究　報告会・・・・・・・・・・・・ 5
地域総合研究所　研究会・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
地域交流活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

■ 所長あいさつ

I would like to take this opportunity to thank the faculty and staff of the International University of Kagoshima and the greater community of which we are a part for their untiring support of the Regional Research Institute. We are pleased to share our current work in this our 59th newsletter.

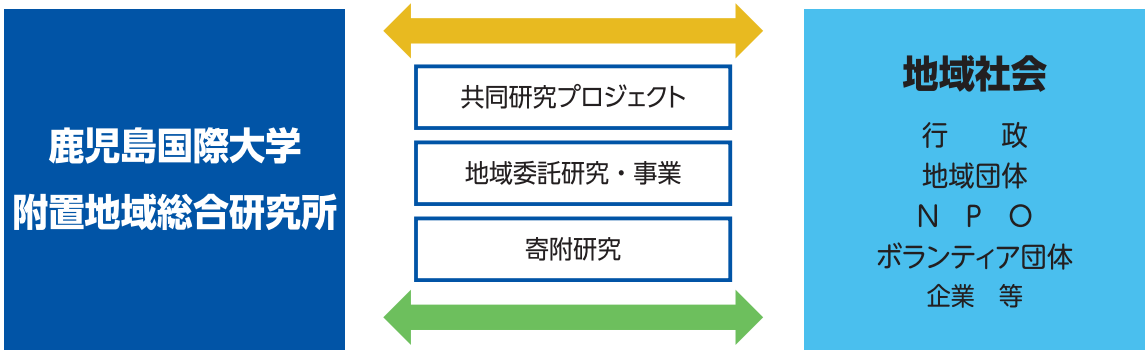
As of April 2024, a new faculty team has begun the consideration of a new research theme. Together and apart we are researching the use of fieldwork as an educational tool that stimulates students and faculty alike and results in a meaningful – and ideally sustainable – connection between the university and the community. Our membership and our interests are diverse, with faculty representing every department in the university. Ryuta Kawasaki is from the Faculty of Welfare Society, Naoko Inadome is a member of the newly founded Faculty of Nursing, Hitoshi Uchiyama represents the Faculty of Intercultural Studies and Norikatsu Hiraide, Kouta Higuchi and I are members of the Faculty of Economics. Our work enjoys the skillful support of Chika Yamamoto and other members of the university staff. In keeping with the diversity of our backgrounds, we are approaching this and other research related to tourism, disaster response and the like from a variety of angles as you will see upon a review of the interim reports included herein.

I would like to note here that the Shimizu Fund is now winding down after a period of eight highly productive years. The International University of Kagoshima is forever grateful for the generosity and vision of Morimitsu and Yoshimitsu Shimizu. We have learned and grown thanks to their support.

The results of our research and the content of this newsletter will also be made available on the International University of Kagoshima's website and in other publications.

Jeffrey S. Irish, Director
Regional Research Institute

■ 本研究所がすすめる地域志向研究の3つのタイプ



1．共同研究プロジェクト

プロジェクト研究は従来から研究所が進めてきた研究方式で、学内の教員を中心に、特定テーマ、特定地域での共同研究を行うものです。

2．地域委託研究・事業

行政や地域の団体・企業からの委託を受けて、研究所が研究員等を推薦し、委託研究を実施するものです。

3．寄附研究

学外からの寄附により本学又は本大学院の研究に相当するものを実施するものです。

A Consideration of Fieldwork Methods and Potential

Jeffrey S. Irish, Professor of Economics

I am taking this unique opportunity to research and consider the role that seminar-based fieldwork plays in the educational development of students and faculty here at the International University of Kagoshima. Each department of the university has set fairly concrete goals for the skills that will ideally be possessed by their graduates. Similarly, the university has defined the kind of thoughtful and productive individual it hopes to send out into society upon graduation.

University-wide goals include – but are not limited to – the ability to identify and solve problems in the student's area of expertise, the ability to communicate effectively with others, a general hunger for and curiosity regarding new knowledge, and a genuine respect for other individuals and cultures. The university makes use of questionnaires and exit interviews in an effort to determine how successful it is in achieving these goals. Using these questions and results as an initial reference point, I will work with my seminar students to evaluate the effectiveness of past fieldwork and study how concretely our time together and in the field has contributed to their attainment of some of the graduation goals being set by the economics department and the university. I will also look at the approaches other faculty are taking to fieldwork and some of the positive outcomes they have enjoyed.

Finally, my students and I will be looking for fieldwork models that are conducive to a long-term relationship between the faculty and staff of the university and the surrounding community. Said "community" includes – but is not limited to – local businesses, local governments and locally active individuals.

「カスタマーレビューを活用した鹿児島県の観光需要分析」

経済学部 講師　平出　宜勝

日本政府観光局（JNTO）によると、2019年における日本全体の訪日観客数は3,188万人と過去最多を記録し、その後2020年から2022年まで新型コロナウイルス感染拡大に伴い大きく減少したが、2023年には2,507万人まで回復してきている。また2024年の現時点においては訪日客数は順調に推移してきており、このまま好調な状況が続けば2019年の年間最多訪日客数を超える予想となっており、いよいよ本格的にインバウンド需要が回復してきた年と言えるであろう。鹿児島県においても中国や韓国との直行便の再開や、海外大型クルーズ船の寄港が増加するなど、新型コロナウイルス禍からの回復の兆しを見せてきている。一方で、外国人宿泊者数はコロナ禍前の４割となっており今後のさらなる回復が期待される。そこで本研究では、鹿児島県を訪れる訪日観光客の需要を分析するため各観光スポットのインターネット上におけるカスタマーレビューを活用し、訪日観光客が実際に観光地を訪れた際の感想や意見を収集し分析を行う。具体的には、収集した過去のレビューを用いて鹿児島県内の観光地の特徴や改善点をテキスト分析を通じて明らかにし、さらに季節や地域による需要変動の要因分析また将来の観光需要の予測を行う。本研究を通じて観光業者や行政が、どのように鹿児島の観光資源を活用し、より魅力的な観光サービスを提供できるかを考えるための一助となることが期待される。

曽木の滝　旧発電所

日置　吹上浜

「企業と地域の持続可能な連携」

経済学部 講師　樋口　晃太

本研究の目的は、産官学地域連携の持続可能なあり方を実践的に探究することである。本研究が探究する持続可能な連携とは、連携活動に参画する学生や企業、地域などの主体にとって満足度が高く、何らかの経済的、あるいは社会的成果を達成した状態を指す。またここで言う企業とは、営利法人としての株式会社だけでなく、非営利法人としての大学や公法人としての地方自治体なども射程としている。

これまでの研究状況としては、以下の２つが挙げられる。①2024年度前期には、株式会社鹿児島レブナイズとの産学連携を実施した。地方会場へのファン動員を通した地域経済の活性化をテーマとして、樋口ゼミ生たちが企画を立案した。具体的には、鹿児島市内の既存ファンをサンアリーナせんだいに動員するための企画、サンアリーナせんだいで薩摩川内市内の新たなファンを獲得するための企画を立案するチームに分かれ、さまざまなアイデアを提案した。②同年度後期には、鹿児島県庁、水土里ネット鹿児島、喜入町中名地区との地域連携を実施している。中名地区内を３コースに分かれてフィールドワークした上で、ゼミ生たちが地域活性化に向けた政策を立案している最中である。

今後の研究予定としては、２つの連携活動への参画者を対象に、インタビューやアンケートを実施して、持続可能な産学官地域連携のあり方を考察していきたい。また２つの連携先とは規模や形態が異なる連携活動を実施する団体への調査も行ないたい。

産学連携

地域連携

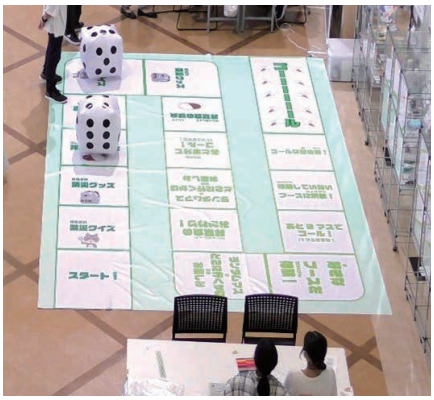
「地域課題解決のための持続可能なプログラム構築」

福祉社会学部 准教授　川﨑　竜太

本研究の目的は、地域課題解決のために地域特性を考慮した仕組みの構築を目指すものであり、地域の社会資源を活かしたインフォーマル資源の開発・拡充について検討する。具体的には、福祉関係人口を増やすために、「防災福祉教育」を入口として地域を基盤とした持続可能なプログラムの構築を目指す。地域課題について、３つの視点（「生活困窮（防貧）」、「防災」、「人材確保」）を挙げ、それぞれの課題に関する文献研究や調査研究を行い、今後の方策について考察を行う。

今年度の研究成果は、昨年度から継続しているフィールドワーク（オプシアミスミでの防災月間でのイベント実施）を通して、防災教育の新しいコンテンツを作成、実施することができた。オプシアミスミでは例年７月～９月に「防災月間」を開催しており、今年度は2024年７月14日（日）にイベントを実施し、昨年度を大きく上回る120名以上の来場者があった。その他、「生活困窮（防災）」「人材確保」について、先進的な実践を行っている事業所や自治体の選定、先行研究を行った。

次年度は最終年度であるため、①地域課題（生活困窮、人材確保）に関する取り組みを行っている事業所等への調査分析、②福祉の視点で防災を考える「防災福祉教育」プログラムの構築を通して、地域課題解決に向けた持続可能なプログラムの構築に向けて研究を進めたい。



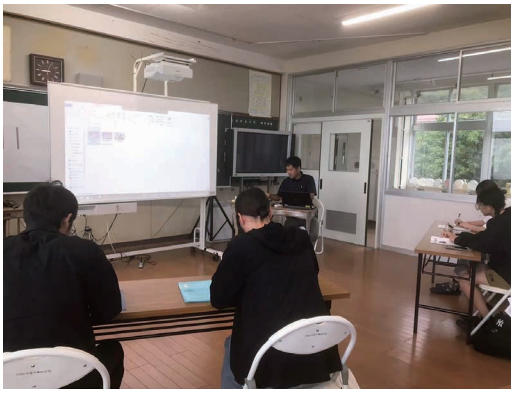
オプシアミスミでのイベントの記録

「地域と学校の協働による授業づくり」

国際文化学部 准教授　内山　仁

地域に開かれた学校づくりや地域の教育資源の活用が言われて久しいが、具体的に踏み出せない学校や教師も多い。この問題を解決するには、地域にある様々なひと・もの・ことを授業に生かしていく際に地域と学校の間にどのようなことが起こっているのか、丁寧に見ていくことが必要である。これまで地域の教育資源の活用については学校や教師の側の主導性を指摘する研究もあったが、学校や教師の目的的な働きかけだけでは地域の豊かな資源を十分に授業に生かすことはできないのかもしれない。そのような思いを持ちつつ、今回は屋久島で地域の教育資源を生かした授業を数多く実践している中学校に調査に入った。

屋久島町立岳南中学校は地域との協働が豊かな屋久島の他の中学校と比べてもさらに充実した授業を行っている。民族楽器に詳しい保護者がいれば音楽の授業に招いたり、地域の豆腐屋さんに家庭科の授業に来てもらったり、郷土史に詳しい地域の人を招いて江戸時代に来島した宣教師と島民の交流について授業をしてもらったりなど、多彩な実践を重ねている。2024年９月、岳南中学校と屋久島南部地域に調査に赴き、調査員の学生がそれぞれの実践の発端や経緯、授業までの流れ、生徒や教師の学び、協力した地域の人々の思いについて聞き取りを行った。その中で、様々な人とのつながりによって実践が生まれており、それは必ずしも学校や教師が意図したところからではなく、偶然的な出会いや飛び込んできた誘いによって発端が開かれ、それが中学校の柔軟な教育課程運営によって実践にまでつながっていっていたことが分かった。



「域学連携地域づくりにおけるフィールドワークの検討」

看護学部 准教授　稲留　直子

フィールドワークは、学生の学問的な知識の深化や社会的な視点・実践的スキル習得の貴重な機会であり、社会人基礎力の涵養といった教育効果が認められる。一方、地域にとっても、若者の地域行事への参画は住民の活力となり地域の資源や魅力を再発見する機会となる。本学看護学部では、人々の地域での暮らしに関心をもてるよう、初年次から「地域」「暮らし」に焦点を当てた２つのフィールドワークを取り入れ、その体験を活かし、国際・地域社会のニーズの変化に対応し、生涯を通して自己を高めることができる人材の養成を目指している。そこで共同研究では、初年次フィールドワークをきっかけとした「学生並びに大学教員の継続的な地域行事参加」を通して、地域と大学が連携して行う地域づくりの在り方を検討する。具体的には、初年次フィールドワークの学生の学びの評価軸の検討・分析と、大学キャンパスを拠点としたフィールドワーク活動の検討を計画している。

清 水基金プロジェクト研究

清水基金プロジェクトは、本学福祉社会学部の高橋信行教授の恩師である、故清水盛光氏から受け継がれた財産をご長男の故清水韶光氏の遺言書に基づき遺贈された寄附金を使用し行われているプロジェクトであり、地域文化や地域振興、地域福祉に関する研究を行い、地域の発展に寄与することを目的としています。

■ 池上彰氏招き、清水基金研究締めくくる報告会 ジェンダー平等と地域発展でも議論

本学地域総合研究所の清水基金プロジェクト報告会が2024年６月８日、ジャーナリストの池上彰氏らをゲストに迎えて行われました。学内の会場には学生や一般市民ら合わせて満員となる約520人が詰めかけ、関心の高さがうかがえました。

報告会のテーマは「地域探究の視角～ジェンダー平等のあり方を手がかりに～」。まず、同プロジェクト代表で本学福祉社会学部の高橋信行教授が、清水基金を活用し７年に及ぶ研究の経緯を説明。学術的視点から６本の論文を掲載した最終報告論集『地域探究の視角』を出版したことを紹介しました。

続いてジャーナリストの池上氏が基調講演。鹿児島は自然や地理的に恵まれているとしたうえで、「それに安住してはいないか。隣県熊本に台湾の半導体メーカーが進出し人材流出が懸念される今、もっと危機意識を持つことが大切である」。今後、地域を活性化するためには、「これまで男性中心のモノカルチャーから、異質な人や考えを受け入れるダイバーシティこそが大切。第二、第三の明治維新をここから始めていくことではないか」と結びました。

ジャーナリスト池上彰 氏による基調講演

清水基金プロジェクト研究

次に、同プロジェクト研究メンバーで京都女子大学の竹安栄子学長が「地域社会の持続的発展に向けて～女性のためのリカレント教育の意義と課題～」と題して、成果報告しました。

プログラム最後のパネルディスカッションは竹安学長をモデレーター、池上氏をコメンテーターに、男女共同参画政策アドバイザーの髙﨑恵氏と南さつま市議の平神純子氏をパネリストに活発にディスカッション。モデレーターの竹安学長が、「鹿児島は地域資源を生かした観光産業がもっと発展していくべきで、女性が最もその資質を発揮できる分野でもある。女性がその価値を発見し、のびやかに行動できる地域をつくっていけば世界に向けても先進地となりうる」とまとめました。

会場の参加者らは、鹿児島の未来を示唆する内容に興味深く聞き入り、満足げに会場を後にされる姿が多く見られ、清水基金研究プロジェクトを締めくくるにふさわしいイベントとなりました。

本学の高橋信行教授

会場は学生や一般市民ら合わせて約520人で満員になった

パネルディスカッション「鹿児島におけるジェンダー平等　－男女共同参画社会を求めて－」

研究会「誰ひとり取り残さない福祉のまちづくり」を開催！

本学地域総合研究所の研究会が2024年11月６日、社会福祉法人 宗越福祉会（広島県）理事の伊藤 大悟氏を講師に迎え、「誰ひとり取り残さない福祉のまちづくり」をテーマにフィールドワーク、座談会、講演会の３部構成で行われました。

◆伊藤　大悟 氏の紹介

専門職としての業務を経て、社会福祉法人の役員に就任後、特別養護老人ホームの施設長として統括事業管理や人材確保等の事業運営に従事。加えて、大学の非常勤講師や職能団体等で講師を務める。2022年県立広島大学大学院経営管理研究科ビジネスリーダーシップ専攻を修了し、同年、月刊福祉（全国社会福祉協議会）において、「公的補助金に依存しないサステナブルな農福連携事業」を執筆。広島県を中心に幅広いネットワークを構築し、農福連携を中心とした連携事業を展開。㈱八天堂ファームと連携し、耕作放棄地となっていたぶどう園を活用し、生活困窮者の方々等の就労訓練の事業を実施する取組みが『令和５年度版 厚生労働白書　地域共生社会の実現に向けた「商工農福連携」の取組み』（p.139- p.140）に掲載された。

まず、南九州市でのフィールドワークは、講師の伊藤氏と所員・学生が南九州市頴娃町別府で古民家再生によるカフェ「だしとお茶の店 潮や､」を訪れました。そこで、「だしとお茶の店 潮や､」の運営をしている株式会社オコソコの代表である蔵元 恵佑氏より、古民家再生によるカフェやゲストハウスの運営、茶や塩などのオリジナル商品開発、コンサルティング事業などを通じて南九州市を中心に鹿児島の農業と地域活性を進める活動について話を聞くことができました。また、茶農家の方からも気候に適した農業のあり方、土づくりの大切さ等のお話も伺いました。

南九州市のカフェ「だしとお茶の店　潮や､」

フィールドワークの様子

講演会に先立って、社会福祉学科学生や卒業生も加わり、MBC ラジオ「ふくしのラジオ！」の公開収録座談会も行われました。同番組は本学社会福祉学科卒業生で MBC タレントの川原田 優華さんがパーソナリティを務めています。学生からは「農福連携においてのひきこもりの方の参加のきっかけは？」や「南九州市でのフィールドワークを通じて広島での事業の取り組みをなにか考えているか？」など質問があり、議論が盛り上がりました。

MBC ラジオ「ふくしのラジオ！」公開収録座談会

研究会「誰ひとり取り残さない福祉のまちづくり」を開催！

メインの講演会は伊藤氏が農福連携を通じた新たな福祉のセーフティーネット構築までの道のりと、現在の福祉・行政・企業による自治体を超えた連携の取り組み、そしてもう一つの事業である困難事例となりうる独居老人への支援について力説されました。会場には多くの市民も参加し、活発な質問がでるなど、有意義な講演会となりました。

講演の概要は以下の通りです。

講演の内容は、はじめに、解決すべき社会課題として「生活困窮者の現状」について説明がありました。講師は、社会福祉法人理事として活躍する傍ら、県立広島大学大学院経営管理研究科ビジネスリーダーシップ専攻で学び、八天堂と宗越福祉会が中心となり、新しい農福連携モデルの取り組みとして、「農福コンソーシアムひろしま」をスタート。農家の人材不足や食品ロスを農福連携により解決し、収穫した作物を民間企業と連携し収益性の向上を図るコミュニティの構築について説明がありました。その他にも、「ふれあい収集事業」の取り組みなども報告されました。特に印象的だったことは、「困難事例が減った」と報告があったことです。講演のテーマに合わせた地域の取り組みであり、地域コミュニティの充実を図ることの必要性について改めて認識できた研修でした。

講演会「誰ひとり取り残さない福祉のまちづくり」

左から川﨑所員、MBC タレント川原田さん、講師の伊藤氏、ジェフリー所長

地域交流活動

●地総研主催イベント種子島にて開催！

【すべての子どもが“かがやく島”～子どもが「育つ力」を引き出せる島づくりを考えよう～】

発行元
鹿児島国際大学
附置地域総合研究所
〒891-0197 鹿児島市坂之上8-34-1（図書館４階）
TEL（099）263-0735 FAX（099）261-3565
URL https://www.iuk.ac.jp/renkei/chiken/